『國民新報』1939年10月29日

お米の節約[[1]](#footnote-1)

　これから來年の収穫期まで國民は切り詰めて切り詰めてお米を節約しなければならない。今年の旱魃は單に朝鮮地方に未曾有のお米の凶作を來たした計りでなく、實に日本全國を通じて相當多量のお米の不足を生ぜしむるに至つた。この不足をば吾々は七分搗米と、雜穀の使用によつて補はうと云ふのである。今や精動聯盟は各愛國班を通じて節米運動に大童であるが、實際に節米の實行者となるのは家庭である。

　お國の呼掛けに應へてお米を節約しよう。先づ白米を止めて七分搗米を使用しよう。そして粟・麥・玉蜀黍・小豆・薩摩薯・馬鈴薯等を混食しよう。而して各家庭でお米の消費を半減、三分一減、少なくも四分一減となるやう努力しよう。そして我が國民の一心一體の例をこゝでも見事に示さう。

　貧乏だからお米を節約しようと云ふのではない。一家の生計のためにするのでもない。國家全體のためにお米を節約しようと云ふのだ。倉庫に幾百萬石のお米を貯へて居る大金持でも、七分搗米に雜穀を混ぜて食べようと云ふのだ。かくしてお米不足の難局を切り拔けると同時に億兆一心の國民的訓練の、今一ツの課程を立派に果た[さ]うと云ふのだ。

　已に朝鮮には五百萬石增米計劃が立つた。來年よりは灌漑施設と共に田作面積がどしどし殖やさるゝことであらう。永遠に食ふに困らぬ國と云ふ目標に向つて、邁進する譯であるが、これを機會に朝鮮の農業が一大飛躍をなさねばならぬのは實に山の利用である。所謂林野と云ふものであるが、大いに之を開墾して雜穀を作る畑や、牛や馬や羊や豚を飼ふ牧場にすることである。山國朝鮮のなんと廣大な地域が利用されずに放置されて居ることだらう。當局では今年白頭山一帶利用價値調査をしたのであるが、朝鮮は何處へ行つても山はあり、山あれば可耕地の麓はあるものだ。粟・薯類・麥類・玉蜀黍は何處に播いたつて出來ると云ふ土壌の朝鮮ではないか。猫額大の平原にこびり附いて、お米計りを食はねばならぬと云ふ法はないのである。調理法さえ宜しきを得れば、畑で出來る穀物だけでも、どんな美味しい御料理でも出來ぬことはない。現に歐米人はお米なしで立派に食卓の贅澤が出來るではないか。畑作と牧畜と漁業と之を合はせれば好い譯である。

　お國でお米を節約せよと云ふから節約しよう。お國で雜穀を食べよと云ふから食べよう。精動聯盟の云ふことは、お國の云ふことであり、町洞會や愛國班で云ふことはお國の命令であるのだ。お國の呼び掛けに應へ、お國の命令に従ふことはなんと嬉しいことであらう。

1. この文章は『國民新報』の影印本にないので、単行本『同胞に寄す』130-131頁に収められているものを載せた。単行本にはルビがふられてない。 [↑](#footnote-ref-1)